

推敲

は  
科 拳  
赴 い  
着 いた

①賈島拳に赴きて京に至る。

口 バ  
乗 り  
作 つ

②驢に騎り詩を賦して、「僧は推す月下の門」の句を得たり。  
口バ 乗り 作つ 思いついた

の字

の字  
し  
よう  
思い

思  
い  
伸  
ば  
し  
欲  
し  
、  
手  
を  
引  
き

勢を

○ 手一 恒已也一 高一 仁

する  
か  
また  
決まら  
なれ  
ず。

気がつかないで 郡の長官の行列 ぶつかつた

⑤ 乃ち そこで 詳しく 言う と 韓愈 が  
具さに 言ふ に、愈 曰はく、「敲くの字佳し。」と。  
—— 言うことには よいだろう

# そのまま 賈島と韓愈は 論じ合つた

⑥遂に轡を並べて詩を論ず。

(口語訳)

賈島は科挙を受験するために都にやつてきた。（都大路を行くのに）ろばに乗りながら詩を作り、「僧は推す月下の門」という句を思いついた。「推す」の字を改めて「敲く」の字に直そうと思い、手を伸ばして門を押したりたいたりするしぐさをしてみたが、まだ決しかねていた。うつかりして大尹の韓愈（の行列）に突き当たつてしまつた。そこで（賈島は）ありのままに申し上げたところ、韓愈は、「敲くの字がよい。」と言つた。（二人は）そのまま轡を並べて（進みながら）詩について語り合つた。